

私の見た日本留学事情

史 蹟*

1. はじめに

1993年に日本に留学し、学位をとってから後、大学の教員として働いてきた中で、当然のことながら、多くの留学生の教育や研究指導、外国人研究者との交流を行ってきた。今回のミニ特集で与えられたテーマは「優秀な外国人留学生や研究者を日本に招いたり、国際連携を進めたりするために何が重要か」ということで、この機会に幾つかのことを考えてみた。

2. 外国人留学生や研究者を日本に招く必要性

私の理解としては、日本の教育・研究現場の活性化のために、外国人留学生や研究者の招聘は重要であると考えている。日本は技術先進国であることは世界中で認められている。言うまでもないが、その裏に東洋と西洋文化の融合でできた独自の教育システムは強力な支えになっている。特に、第二次世界大戦後、人口の増加、経済の高速発展、技術力の備蓄などによって、教育・研究の現場が活性化され、多くの優れた人材、優れた研究・開発成果を社会に提供でき、技術進歩に大きく貢献したと考えられる。しかし、80年代末からの経済発展の停滞、人口の減少、生活水準向上などによって教育現場にも多くの影響が出てきている。よく言われているのは以前と比べると学生の競争意識、ハングリー精神、挑戦意識の低下などがあると思う。一方、不景気や国際化などの影響で、社会的に競争が益々激しくなっている現状の中、これは明らかに矛盾した状況である。

日本の高い競争力を維持するために、大学の活性化は大きな課題になってきている。その方策の1つは優秀な留学生を招くことである。留学生を大学院入学、勉強、研究、就職などいろいろな場面で競争に参加させ、教育・研究現場の活性化を図る。日本政府は既に、2008年に「留学生30万人計画」を打ち出している⁽¹⁾。これは2020年を目途に、留学生の総人数を30万人まで増やす計画である。現在、日本の大

学・大学院在学生の人数はおおよそ280万人なので⁽²⁾、この目標を実現できれば、在学学生10人に1人が留学生の割合になり、教育・研究の現場に大きく影響を及ぼす人数になると思われる。

3. 現状はどうなっているか

振り返ってみると自分が留学してからの18年間余りの間に、日本の留学事情が大きく変わったことに気がついた。国際化や日本周辺の国の経済発展によって、留学生を受け入れる環境、留学生自身の構成などが大きく変わった。1つの例としては、以前より留学生を支援するプログラムが多くなってきたことが挙げられる。例えば、グローバルCOEやリーディング大学院などがある。それ以外に私のいる大学には国際大学院というプログラムもあり、英語の講義を多く開設し、日本語のできない留学生も勉強・研究ができる環境を築いてきた。これらのプログラムの経済的な援助などで多くの優秀な留学生や若い研究者が日本に来られるようになり、勉強や研究に専念でき、よい成果を挙げることができるようになった。私の周りにもこれらのプログラムの留学生が多くいるが、ほとんどの学生は積極的に勉強、研究に取り組んでおり、日本人学生に良い刺激を与えている。輪講や勉強会などを英語でやる研究室も増えている。また、独立行政法人物質・材料研究機構では、様々なプログラムにより外国人研究者の比率を上げることで、研究アクティビティーが向上することが相関性調査の結果で明らかになっている⁽³⁾。つまり、外国人留学生や研究者は日本の教育・研究の現場の活性化に貢献できると考えてよい。

もう1つの変化は、多くの留学生が日本で就職できるようになったことである。私が留学していたときによく言われたことは、アメリカは移民の社会なので、留学生が就職しやすいが、日本は異なり、留学生の就職は大変難しいということだった。しかし、最近は様子が変わって、大手企業を含む多くの企業が積極的に留学生を採用するようになった。これは経済活動の国際化の影響だと考えられる。つまり、今の時

* 東京工業大学教授；材料工学専攻(〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1)
Current Situation of Overseas Students in Japan—View of a Former Foreign Student—; Ji Shi (Graduate School of Materials Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, Tokyo)
Keywords: *foreign students, globalization, revitalization of educational sites, human resource*
2012年7月10日受理

